vinetur

スペイン・カスティーリャ・ラ・マンチャ州、干ばつに強いブドウ台木の3年調査を開始

テンプラニーリョとマカベオを高温・水分ストレス下で評価し、重要なワイン産地の植栽判断に役立てる研究が始まる

2026年11月17日（火）



カスティーリャ・ラ・マンチャ州政府は11月16日（月）、スペイン有数のワイン産地の一つで深刻化する二つの課題、干ばつと高温に対するブドウ畑の耐性を高める方法を検証する、3年間の新たな研究プロジェクトを発表した。

RESILVIÑAと名付けられたこのプロジェクトは、シウダ・レアル県トメジョーソにある農食品・林業研究開発地域研究所（IRIAF）で発表された。州政府によると、期間は36カ月で、テンプラニーリョとマカベオを異なる台木に接ぎ木した場合の生育を調べ、水分ストレスや高温により強い組み

合わせの特定を目指す。

研究が取り組むのは、南欧のブドウ畑が直面する中心的な課題の一つだ。降雨の予測が難しくなり、熱波の頻度が高まる中で、どうすれば生産量とブドウの品質を維持できるのか。具体的には、異なるブドウ樹と台木の組み合わせを圃場で比較し、栽培面での反応と醸造適性の双方を評価する。醸造適性には、ワイン造りにおけるブドウの特性が含まれる。

明確な成果が得られれば、生産者はより厳しい気候条件に適した植栽用資材を選ぶための新たな判断基準を得られる可能性がある。その影響は農場管理にとどまらない。ワイン業界、さらには安定したブドウ供給と一貫した果実品質に依存する飲料業界の一部にとっても、水不足や高温への適応が進めば、将来の生産に対する構造的なリスクの低減につながり得る。

州政府によると、この研究では生産者の意思決定を支援する技術ガイドと予測モデルを作成する。これらのツールは、ワイン生産者が地域ごとの条件に適した台木を選び、カスティーリャ・ラ・マンチャ州のブドウ畑の長期的な耐性を高めるのに役立つ見通しだ。

プロジェクトには、Virgen de las Viñas、Mancha Occidental II地下水利用者協会、Mancha Norte農村開発グループ、IRIAF、カスティーリャ・ラ・マンチャ大学（UCLM）の5団体が参加する。生産者、水管理関係者、研究機関が参加する構成は、生産と資源制約の双方に焦点を当てるプロジェクトの性格を反映している。

発表会で、州の農業・畜産・農村開発相フリアン・マルティネス・リサンは、ワイン産業がカスティーリャ・ラ・マンチャ州の経済とアイデンティティーを支える重要な存在だと述べた。州政府によると、同産業は州内総生産の5%を占め、年間20億ユーロ超を生み出しているという。

こうした数字は、適応研究が公的支援を受ける理由を示している。カスティーリャ・ラ・マンチャ州は欧州最大級のブドウ栽培地域であり、生産者は水の利用可能量の減少、気温上昇、ブドウ畑の収益性維持への圧力という複合的な影響にさらされている。台木の選択は生産者が活用できる対策の一つだ。根系は、ブドウ樹の干ばつへの対応、養分の吸収、ストレス下での生育に影響を与えるためである。

州政府によると、RESILVIÑAは、いわゆるオペレーショナル・グループを軸とした、より広範なイノベーション・プログラムの一環だ。この枠組みは、農家、企業、協同組合、大学、研究機関を応用プロジェクトで結びつけることを目的としている。州政府によると、カスティーリャ・ラ・マンチャ州ではこの制度を通じて42件のイノベーション・プロジェクトが承認され、約1,000万ユーロの助成が行われている。

州政府によると、42件のうち農業分野が14件、畜産分野が15件、農食品分野が13件を占める。UCLMは26件、IRIAFは12件に参加しており、州政府はこの参加規模が研究成果の実用化を後押しするとしている。より広範なイノベーション事業には、州立農業技術研究所、カスティーリャ・ラ・マンチャ産業技術センター（ITECAM）、コルドバ大学、アルカラ大学、マドリード工科大学、キノコ研究・実験・サービスセンターなども参加している。

州政府はRESILVIÑAを、農業生産性と持続可能性のための欧州イノベーション・パートナーシップ（EIP-Agri）の一環として紹介した。同パートナーシップは、農業や食品生産における具体的な課題の解決を目指すプロジェクトを支援する。今回の課題は明確だ。気候条件が厳しさを増す中、ブ

ドウ畑の生産性をどう維持するかである。

生産者にとって、このプロジェクトの意義は、圃場試験から商業規模で活用できる提言が得られるかどうかにかかっている。テンプラニーリョはスペインで最も広く栽培される赤ワイン用ブドウ品種の一つであり、マカベオは白ワインや一部のスパークリングワインの生産で重要な品種だ。特定の台木が干ばつや高温下での生存率、収量、ブドウのバランスを改善するという知見が得られれば、新しいブドウ畑の植栽判断や、既存畑の将来的な植え替え計画に影響を与える可能性がある。

このプロジェクトは、ブドウ栽培と水管理の結びつきも強める。参加団体の一つは、地下水資源への圧力が長年深刻な課題となっている地域、Mancha Occidental II地下水域の利用者を代表している。そのため、このプロジェクトはブドウ畑の研究にとどまらず、より厳しい環境上の制約に農業生産を適合させる広範な取り組みの一部でもある。

発表主体が州政府であることから、プロジェクトの最終的な成果の多くは、今後実証される必要がある。それでも、今回の開始発表は、行政と業界の関心がどこに向かっているかを示している。圃場で検証し、技術的な助言に反映し、より乾燥し高温になる未来に直面する生産者が活用できる適応策だ。